

[課題演習概要]

読解力を身に付けるための自己内対話を活かした国語科の授業づくり —対話による自己の形成を目指して—

平 田 三 弥

Miya HIRATA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
中等教科教育高度実践力プログラム

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード：読解力，自己内対話，自己の形成，対話，内言と外言

1 研究の目的

文部科学省によると、高等学校学習指導要領（平成 30 年度）の改訂による国語科教育の改善の方針として、文章を読むプロセスの指導の充実が挙げられている。読解力とは、ただ文章を読み取るだけではなく、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義されている。本研究の目的は、生徒がこのような読解力を身に付ける方法を探るとともに、思っていることや考えていることを書くことで外言化させ、自己への気づきを促し、自己の形成ができるような授業づくりの方法を明らかにすることである。

2 研究の計画

| | |
|-------|------------------------|
| M1 前期 | 先行研究調査 |
| M1 後期 | 読解力形成の基礎についての考察 |
| M2 前期 | TA 実習校での授業実践・授業分析 |
| M2 後期 | TA 実習校での授業実践・授業改善・質的研究 |

3 研究の内容

(1) 先行研究

生徒が求められる読解力を身に付けるために、「自己内対話」を中心とした読解力の育成の仕方について考察を行う。目指す生徒像を「文章（テキスト）を読み取り、そこから得た考え方を自分

の経験と比較し考えたことを自分の言葉で書くことができる生徒」とする。そこで、「自己内対話」を中心とした読解力の育成の仕方について内言と外言の視点から考察を行う。まず、「自己内対話」について、武田(2018)は『自己』というものを複数の『I ポジション』として捉え、その複数の I ポジション同士が「対話」を行うことによって新たなものが生み出さ」とれると述べる。また、「I ポジション」には「内部ポジション」と「外部ポジション」があると述べられ、『内部ポジション』と『外部ポジション』との間で対話が行われること、またそれを絶えず更新しようと往還し続ける事こそが『新たなもの』を生み出していくための『自己内対話』である」と述べられている。この指摘をもとに、授業内で文章を読む際に他者との対話を活性化させることで自己内対話が生じると推測する。自己内対話で生じる複数の自己は、文章を読む時の着眼点によっても変化し、あるひとつの I ポジションから見た自己の中では他のポジションの自分は自己内他者として存在するだろう。

そして、目指す読解力を身に付けるためには文章を読むだけではなく、書く力も必要なのではないかと考え、書く力をつける方法について先行研究を調べた。児童言語研究会（1976）では、読み方の指導では文章に書かれていることを読者である生徒が「話しかえ」をしていき、読みを豊かなものとしていくことを述べている。脳内に思い浮かんだことばを言語化していくことで具体化し、逆に表象の本質を見出し言語化することで抽象化していく。このように生徒が抽象化と具体化を繰り返しながら言語化することで「言語によっ

て思考し言語によって認識する」ことができることを明らかにしている。

書くことや話すことによって、内言を外言化し、生徒の読解力や書く力が向上し、読みが深められると考えられる。そこで、生徒が思っていることや考えていることを授業内で書くことで外言化させるための授業づくりについて考えた。具体的には、図1に示した自己内対話の前提である自己への気づきを促すための方法について考えた。

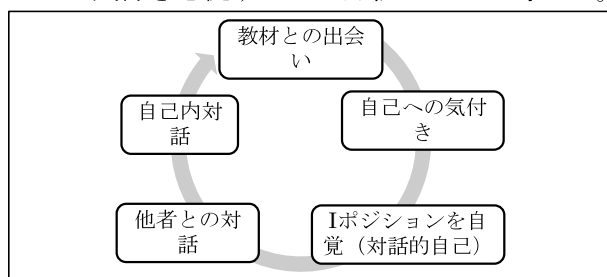


図1 授業内の生徒の学習過程

(2) 授業実践

| | |
|----|-----------------------|
| 対象 | 県立高等学校1学年1学級 |
| 単元 | 体育祭の感想文を書く（200文字） |
| 目標 | 読む人のことを考えて体育祭の感想を書こう。 |

| | |
|----|------------------|
| 対象 | 県立高等学校3学年3学級 |
| 単元 | 川柳コンクール応募作品制作 |
| 目標 | 自分にしか作れない川柳を作ろう。 |

(3) 授業実践の考察

自己への気づきを授業内で目指しているのは、自分自身をメタ的に認識する「Iポジションの自覚」が自己内対話の根底にあり、他者との対話のためには自己への気づきが不可欠であると考えたことが背景にある。自己への気づきとは具体的に、自分がどんなことを考えているか、どんな学びをしたかを話すことや書くことで他者に対して具体化して表出することを指す。また、目指す自己の形成とは、自分の意見を確立させることであり、自己内対話の土台になると考えている。

授業実践では、自由に自分の思ったことを表出させようとしても、かえってどのように表出すれば良いかわからないという生徒が多かった。そこで、教師が考えるための手順や表出するための方法を机間指導したところ、読むことや書くことが苦手な生徒の内言を引き出すこともできた。内言を外言化するにあたり、具体と抽象を繰り返すことによって自分と向き合い、自己への気づきを実現することができたのではないかと考えた。

授業内の生徒の様子においても、生徒が主体的に取り組むことができていた。その背景として、

他者との対話を通して、生徒が自分の思っていることや考えていることを整理し、他者と意見を共有することによって自己と向き合うことができたためであると考えられる。授業実践での教師の手立てとしては机間指導による教師対生徒及び生徒同士の対話を重点的に行った。その結果、生徒が独力で外言化できなかった内言を引き出し、語彙の面でも支援ができたので、書く力を身に付けるためには有効であったと言える。書く力につながるだけではなく、生徒が自分の考えをさらに深め、向き合い、自己への気づきから自己の形成にもつながるのではないかと考えている。外言化の手段として「書くこと・話すこと」があり、他者との対話によって自己の内言を外言化することができ、そこで整理された内言を外言化された自己の認識を整理して書くことで書く力の育成にもつながると考えた。

4 成果と課題

○生徒が思っていることや考えていること（内言）を話すこと・書くことで外言化させるための教師の手立てを具体的に考え、実践できた。

○机間指導や生徒同士の対話は生徒が自分自身と向き合い、考えを深め、外言化するために有効な方法であることが明らかになった。

○段階的に内言を外言化するための授業プリントを作成することができた。

●教師との対話を少なくとも自己の形成や自己内対話につながるような生徒同士の対話の方法や授業づくりの方法について考える必要がある。

●生徒自身がメタ認知的に自己の形成のレベルを認識し、読解力を深める授業づくりを考える。

主な引用・参考文献

- 文部科学省 資料4-6 PISA（読解力）の結果分析と改善の方向（要旨）：文部科学省（mext.go.jp）
 文部科学省 2018 高等学校学習指導要領（平成30年度告示）解説 国語編
 井上尚美 1989 「言語倫理教育入門—国語科における思考—」 明治図書
 児童言語研究会 1976 「新・一読総合法入」 一光社
 武田裕司 2018 「学習者の『自己内対話』活性化の手立てに関する考察」 富山大学
 武田裕司 2018 「学習者の『自己内対話』活性化の手立てに関する考察—大河原忠蔵氏「状況認識の文字文学論を手がかりに—」 日本教科教育学会誌, 41(3), 43-55